紳士と熟女のためのお伽噺／海に帰った人魚姫

中村もへじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紳士と熟女のためのお伽噺／海に帰った人魚姫

【Ｎコード】
Ｎ６７９３Ｔ

【作者名】
中村もへじ

【あらすじ】
昔々ある所に一人の漁師がおりました。
ある良く晴れた日にいつもように船に乗り海で漁をしていると・・

起（前書き）

いつもと一味違った“紳士と熟女のための童話”を書いてみました。

起

昔々ある所に一人の漁師がおりました。

ある良く晴れた日にいつもように船に乗り海で漁をしていると、網にたくさんの魚がかかった。すると、その中に一際キラキラとひかる白い魚が混じっている。

漁師はその白い魚を手にとって見た。

魚は海の中を泳ぐのに無駄のないしなやかな曲線で形作られ、そのウロコは真珠のような七色の光沢をはなって、尾びれも背びれも太陽の光をうけてキラキラと輝いている。

驚くほどきれいな魚だった。

漁師はそのきれいな魚を光にかざして眺めていると、魚は漁師の手の中で体を震わせて飛び跳ねた。

そこで、漁師は魚を海に返した。

それから、今夜食べる分の魚を魚籠に入れると、獲った魚の大半は海に返してやった。

漁師はこの辺り一番の漁師だったのだが、数年前に流行り病で妻と子をなくし、今はただ静かに時の流れに身を任せる日々であった。

男が家に帰ると窓から煙が出ている。

火を消し忘れたかと漁師がかまどに目をやると、そこには見目麗しい女が釜の前に立っていた。

「何をしている？」

と、漁師が聞くと、

「食事を作っています」

と、女はにっこり笑いながら鈴を転がすような声で答える。

見ると、釜からは白い飯が鍋からは貝と海草の汁がうまそうな匂いと湯気を上げていた。
「飯と汁を作ったのか？」
漁師が聞くと、
「おかずは貴方が今獲った魚です」
と、女は答え、漁師の持っていた魚籠からちょいっと魚を取ると、見事な手さばきで魚をおろし始めた。
そしてさばいたばかりの魚を盛り付け、飯を茶碗つけ、貝と海草の汁を椀に盛り付けて、
「お酒はお召しになられますか？」
と、女が言った。
「そうだな」
と、漁師は戸惑いながら返事をすると、どこからともなく女が酒を持ってきて並べた。
こんな海っぺりに狐でも出たのかと漁師が訝っていると、
「どうぞ召し上がれ」
と、女はにっこり笑った。
「お前は食わないのか？」
と、漁師が聞いてみると、
「ご一緒して宜しいのなら」
と、女が答える。
そこで、漁師はしまっておいた夫婦茶碗をゴソゴソと出してきて、女に渡す。
すると、女は自分にも飯をつけて、漁師の向かいに座ってにっこり笑って、
「いただきます」
と、箸を持って食事を始めるのだった。

酒も入ってほろ酔いかげんになってきた頃、女が口を開いた。

「暫く私をここに置いて下さいませんか？」
漁師は戸惑いながら答える。
「置くのは構わないが、ここには俺一人しか住んでいない」
「存じております」
すると、女はすっと漁師の側に座り、その腕を漁師に絡ませて魅力的な笑みを浮かべた。
漁師はさすがにこれは狐か狸に一杯食わされたに違いないと思ったのだが、そのまま真っ白な滑らかな女の肌に吸い付いてみた。女は嫌がる素振りもしないので、漁師はきっとこれは夢を見ているに違いないと思いながら女に覆いかぶさるのだった。

起（後書き）

いつものふざけた“紳士と熟女のための童話”はこちらからどうぞ♪
http://www.geocities.jp/mohezi_n/shortshort/shortshort_index.html

承（上）

翌朝、漁師が目を覚ますと、かまどの前で女が振り返った。
女はにっこり微笑むという。
「おはようございます。朝ご飯の用意が出来ています」

さて、この夢は一体いつ覚めるのだろうかとも思ったのだが、漁師は女が進めるままに朝飯を食べ、そしていつものように漁に出かけた。
そしてその日も今夜食べる分の魚を魚籠に入れ、残りは海に返して家に戻った。
すると、女はまだ家におり、飯を用意して待っていた。

そんな風にして幾日か経った。

幾日か経ったある日、漁を終えて家に戻ると女がいない。
家の中を見渡し、戸口から外にで家のまわりとぐるりと一周した。
もうどこかに行ってしまったんだろうかと、漁師が戸口に佇んでいると、
「お前さま、そんな所でどうなさったのですか？」
と、背後から鈴を転がすような声がした。
「いや、別に」
と、振り返った漁師は戸惑いが隠せなかった。
女は頭からずぶ濡れになっていて、真っ白な滑らかな女の肌に黒い髪の毛が海草のようにぺたりと貼り付いていた。

「海に落ちたのか？」
という漁師の問いには答えず、女はにこにこと楽しそうに貝を差し出してきた。
「見てください」
何がそんなに楽しいのかと訝かみながらも漁師が聞く。
「焼いて食べるのか？」
それを聞いた女は一際可笑しそうに笑った。
「焼いて食べるのも良いのですが、その前に貝を開いて中を良く見てくださいな」
漁師は言われるままに錐で貝の口を開くと、そこには大きな真珠が入っていた。
驚く漁師を愉快そうに眺めた女は笑いながら問う。
「お前さま、何か欲しい物にはございますか？」
漁師は女に目をやり首を横に振った。
「これはお前が見つけたんだろう。お前の欲しい物と交換しよう」
女は首を傾げて呟いた。
「欲しい物などありません」
そして真珠を魚籠に放り込み、女はにっこり笑ってその腕を漁師に絡ませて言う。
「今夜の夕飯は何ですか」

それから時々女は真珠をみつけてくるのだが、真珠は魚籠に放り込まれるのだった。

承（上）（後書き）

いつものふざけた“紳士と熟女のための童話”はこちらからどうぞ♪
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｍｏｈｅｚｉ
｜ｎ／ｓｈｏｒｔｓｈｏｒｔ／ｓｈｏｒｔｓｈｏｒｔ－ｉｎｄｅｘ．
ｈｔｍｌ

承（下）

ある時、漁師は漁で捕まえた魚を逃がさずに全部引き上げて帰ってきた。

「まぁ、今日は大漁ですね」
女が言うと、
「米や味噌や醤油がそこをつき始めたから、村に行って交換してくる」
と、漁師は答えた。
「それなら魚籠の中の真珠もお持ちになってください」
と、女がいうので、漁師は女と魚籠を交互に見比べてから聞いた。
「何か欲しい物はあるか」
「早く帰ってきてくれれば何もいりませんわ」
「そうか」
そして、漁師は魚と真珠をを持って村に向かった。

間もなく漁師は帰ってきて、米や味噌や醤油と一緒に
「加工してもらった」
と、真珠の首飾りを女に渡した。
「まぁとてもきれいだわ。ありがとうございます」
女は真珠の首飾りを見ながらにっこり笑うと、魚籠に入れた。

次に漁師が村に行く時も真珠を持っていき、今度は腕輪に加工してもらった。
「まぁとてもきれいだわ。ありがとうございます」
今度も女は真珠の腕輪を見ながらにっこり笑うと、魚籠に入れた。
その次に漁師が村に行く時も真珠を持っていき、今度は髪飾りに加

工してもらった。
「まぁとてもきれいだわ。ありがとうございます」
女は真珠の髪飾りを見ながらにっこり笑うと、今度は魚籠に入れずに髪飾りを自分の頭につけた。
その様子を眺めながら漁師は満足げに笑った。
そこで女がひどく驚いた顔をして漁師に抱きつくので、逆に漁師の方が驚いた。
「どうした？」
と漁師が聞けば、
「お前さまが笑ったのは初めてですね」
と、女が鈴を転がすような声で一際うれしそうに笑って抱きつくのだった。

承（下）（後書き）

いつものふざけた“紳士と熟女のための童話”はこちらからどうぞ♪
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｍｏｈｅｚｉ
｜ｎ／ｓｈｏｒｔｓｈｏｒｔ／ｓｈｏｒｔｓｈｏｒｔ－ｉｎｄｅｘ．
ｈｔｍｌ

転

最近、村では漁師が見事な真珠を持ってくると評判だった。

一体全体どこでそんな見事な真珠を獲ってくるのだろうと、村の若者の一人が米や味噌や醤油を調達しにきた漁師の後をつける事にした。

若者が自分の船で漁師の船を追いかけて行くと、岩礁の見え隠れする潮の流れの速い海を漁師の船が難なく進んでいくのが見えた。

いやはや噂どおりの海の男だと感心する間もなく、若者の乗った船はあっちをぶつけこっちをぶつけ、しまいには沈みかけながら、若者は命からがらやっと漁師の家の近くの岸にたどり着いた。

そこには嵐がきたら吹き飛んでしまいそうなあばら小屋が建っていた。

男やもめになってから人里離れた辺鄙な所に篭ったと噂には聞いていたけれど、いやはやとんだ変わり者だと心の中で悪態をついたのだが、いやこれは都合がいいかもしれないぞと若者は思い直した。

このまま遭難したとでも言って家に上がり込み、上手い具合に真珠の取れる場所を聞き出し、ついでに船も直してもらおうと若者は思ったのだ。それなら元気な声を張り上げてはいかにも胡散臭い。もっと近づいて、偶然を装って倒れておこうと静かに物音を立てないように漁師の家に近づいていくのだった。

するとなんという事だろう。

天女のように美しい女がアバラ小屋から出てきたかと思うと漁師の首に抱きついた。

そして、女が漁師に貝を渡し、漁師が貝の口を開いて真珠を取り出しているのが見えた。

これは一体どういうわけなのだろうと若者は首を傾げた。
どうやら漁師と女がねんごろの仲なのはわかった。そしてもしかしたら女が真珠を獲ってくるのかもしれないというのもわかった。しかし何故こんな所にこんな美しい女がいるのだろうと考えていると、若者はひらめいた。きっとたまたまこの近くで遭難して漁師に助けれ、そのまま居ついているに違いない。
それなら女をうまくかどわかし、女と真珠の量を手に入れればいいじゃないか。

そこで翌日漁師が漁に出かけた所を見計らって若者は漁師の家あばら小屋を訪ねた。

転（後書き）

いつものふざけた“紳士と熟女のための童話”はこちらからどうぞ♪
http://www.geocities.jp/mohezi_n/shortshort/shortshort_index.html

結

翌日、漁師は漁に出ようと船に乗って漕ぎ出したものの船が沖に向かって進まない。
長年のカンで潮の流れが読めるのだが、今日はどうも沖に向かう潮が見つからない。
そこでそんな日もあるだろうと戻る事にした。

家に戻ると見知らぬ若者が戸口に立っている。
「お前は誰だ？」
と、漁師は言いながら辺りを見渡した。
「女なら此処だぜ」
と、若者が持っていた網を持ち上げる。
網の中では白い魚がぱたぱたと尾をしならせて跳ねている。
そのウロコは真珠のような七色の光沢を放っていて、何時ぞやに海に返してやった白い魚じゃないかと漁師は思った。

「どけ！」
と、漁師が若者を押しのけ家に入り、女の姿を探して家の中を見渡した。
そんな漁師に若者が話しかける。
「勝手にここにいた事は謝るけども、まずは俺の話を聞けよ。あんたの探しているのはあの天女みてえな女だろ」
漁師が振り返ると若者はにやけた顔しながら、もう一度持っていた網を持ち上げてこう言った。
「あんたの探している女はこれだよ。俺が人間の女に化けた妖魚を捕まえてやったんだ』
次の瞬間、漁師が衝動的に若者を殴り飛ばすと、若者はよろめいて

網を落とした。
すると、手放した網にから白い魚が飛び出した。
白い魚は網に尾を引っ掛け、上半身だけ女の姿に戻って横たわっている。
そして、つぶらな瞳で漁師を見上げてこう言った。
「私を海へ戻して貰えませんか」
漁師が黙っていると、若者は口の端を拭いながら立ち上がり言う。
「見てみろよ。こいつは人間の女じゃない。化け物だ。だから、こいつを見世物にしてがっぽり稼がねえぇか」
それを聞いた途端、漁師は海で鍛えた体に全身の力を込めて若者をもう一度殴り飛ばした。
若者が床に伸びて静かになると、漁師は女を抱き上げこう聞いた。
「怪我はないか？」
「はい。しかし正体を知られてしまった以上もう一緒にはいられません」
「お前が何であってもかまわない」
「いいえ、駄目なんです」
「どうしてもお前と一緒に居たいと言ってもか？」
と、漁師が言うと、女は数回瞬きをして聞き返した。
「私と一緒に来てくれるのですか？」
「お前一緒に行こう」
「何もかも失なってもかまわないのですか？」
「かまわない」
漁師は女を抱く手に力を込めた。

「始めから何も持っていない。お前を失ったらもう失うものすらない」
漁師が答えると女は漁師の首に両手を回してしっかり抱きついた。
「私もお前さまとずっと一緒に居たいです。どうか私と一緒に海の中で暮らしてください」
「わかった」

漁師が女を抱き抱えたまま立ち去ろうとすると、気がついた若者が口をひらいた。
「人間は海の中じゃ生きていけねぇぜ。息ができねぇんだからな」
漁師が若者にちらりと目をやると、若者は続ける。
「その妖魚はあんたを騙して海に引きずりこもうとしているんだ。海にはそういう化け物がいるって、あんたも漁師ならよく知ってるだろ」
若者は喉に何かをつまらせたのか咳払いをした。そして、また話を続ける。
「だから、こいつを見世物に・・」
若者が最後まで話をするより先に漁師の足が若者の腹に入り、若者は床の上で再び静かになった。

それから漁師は女を抱いたまま海に向かった。
海はいつになく波が荒れ狂っている。
しかし漁師が女を抱えたまま海に近づくと、波は磨きぬかれた鏡のように静かになった。

「おい、考えなおせよ！」
と、若者が声の限りに叫んだが、漁師は振り返らない。

漁師はただ黙って女を見つめている。

その時、漁師の肩越しに女が妖艶な笑みを浮かべたかと思うと、
どこからともなく大きな波がやってきて、音もなく二人を包みこみ、
何事もなかったかのようにどこかへ消えた。
後にはただ打ち寄せる波に佇む若者の姿あるばかりだった。

こうして人魚は愛しい男を海に連れていきましたとさ。
めでたしめでたし。

結（後書き）

いつものふざけた“紳士と熟女のための童話”はこちらからどうぞ♪
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｍｏｈｅｚｉ
ｎ／ｓｈｏｒｔｓｈｏｒｔ／ｓｈｏｒｔｓｈｏｒｔ－ｉｎｄｅｘ．
ｈｔｍｌ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6793t/

紳士と熟女のためのお伽噺／海に帰った人魚姫

2011年10月9日04時44分発行